

# 大都市中学校教官の指摘する 非行に関する統計的研究(2)

荒 井 貞 雄  
永 田 千 恵 子

## 序

### I, 研究問題

1. 補導についての序列
2. 教官による差異

### II, 研究方法

1. 時期
2. 方法
3. 調査対象

### III, 資料の整理

### IV, 結果と考察

### V, 要約

文献

## 序

大都市中学校教官の指摘する非行に関する統計的研究(1)——その原因について——は、既に本誌第12巻第2号、第13巻合併号で報告した。その主なる内容は、現職教官の指摘する非行原因は何か、ということであり、学校環境を非行原因としてあまり重視していないという特異な点を発見した。

研究(2)では中学校教官について、補導経験の有無、非行への第一段階となる喫煙などの不良行為の補導、補導に成功した原動力、効果があがらなかった理由等、補導に関する一連の問題を分析して、その実態を把握したいと考えた。なお、今回は誌面の都合で、学校の規模および校区の分析を割愛し、教官の分析のみにとどめた。

### I 研究問題

次の各項について究明しようとする。

1. 教官の指摘する序列
2. 教官による差異

大都市中学校教官の指摘する非行に関する統計的研究(2)

Ⅱ 研究方法

1. 時期

昭和40年7月初旬から24日までの期間

2. 方法

(1)次の質問とチェックリストの方法による(4問)

問題Ⅰ

あなたは戦後非行生徒の補導の経験がありますか。

- (イ) はい (ロ) いいえ

問題Ⅱ

一般的補導に成功した時の原動力は次のどれでしょうか(○で囲んで下さい)

- (イ) 指導者の愛情 (ロ) 家庭事情の解決 (ハ) 友人関係の解決 (ニ) 本人の自覚  
(ホ) 将来に対する希望 (ヘ) その他

問題Ⅲ

効果があがらなかったと考えられる理由は次のどれでしょうか(○で囲んで下さい)

- (イ) 無自覚 (ロ) 意志薄弱 (ハ) 身体虚弱 (ニ) 家族の非協力 (ホ) 難問題の未解決  
(ヘ) マスコミ関係 (ト) その他

問題Ⅳ

(a) 他校の生徒が喫煙などの不良行為をしている場合にあなたは積極的に補導しますか。

- (イ) はい (ロ) いいえ

(b) その生徒の在籍校に連絡するだけですか。

- (イ) はい (ロ) いいえ

(2)この質問は大阪市立中学校教育研究会道徳部と相愛女子大学及び短期大学研究室との共同で、道徳の時間実施に関する29項目に亘る第3次調査のうちの4項目である。

(3)質問紙の配布、回収、および被調査者の年齢、専門教科等の記入内容などは前誌研究(1)に同じである。

3. 調査対象者

前誌研究(1)に同じ。

Ⅲ 資料の整理

有効回答424、有効回答率83.0%(集

質問別回答		整理結果	
積極的に補導しますか	在籍校に連絡するだけですか	積極的補導	補導する
はい	いいえ		
はい	はい		
はい	無答		
いいえ	はい		
無答	はい		
いいえ	いいえ	し な い 補 導	補 導 す る
いいえ	無答		
無答	無答		
		無答	無答

計後の到着分は除いた)

大都市中学校教員の指摘する非行に関する統計的研究(2)

1. 全体と回答者学校別とに分けて行なった。
2. 回答集計の項目別分類方法は前誌研究(1)に同じ。
3. 回答が2答に亘った場合の処理方法は前誌研究(1)に同じ。
4. 問題Ⅳは2回答を要求したため各々の回答の、はい、いいえ、無答を組合せて前頁の表のように整理した。なお、

積極的に補導しますか。                      無答  
 連絡だけですか。                              いいえ

の回答はなかった。

Ⅳ 結果と考察

問題Ⅰ

1. 本調査にあらわれた結果を第1表によって全体的にみると、補導経験のある教員82.5%、経験のない教員15.3%、無答2.1%となっている。

第1表 補導経験の有無

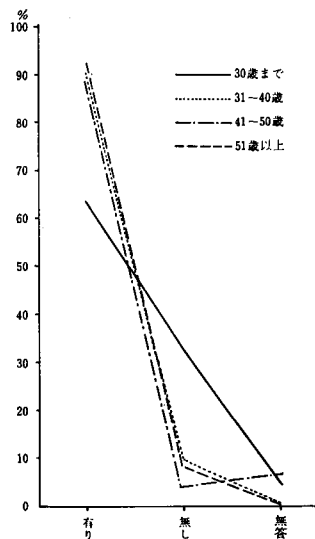
	はい	いいえ	無答	計
問題Ⅰ(全体)	82.5 (350)	15.3 (65)	2.1 (9)	100% (424名)

注 カッコ内は実数  
 はい……経験あり      いいえ……経験なし

2. 年齢別による分析 (第1図)

(1)全体的にみると、年齢が高くなるに従い補導経験のある教員が増加し、経験のない教員、および無答は減じている。しかし、41～50歳のみ、補導経験のある教員が、その前年令層よりもやや減じ、無答が6.1%で2位であり、中年層として注意すべき点である。

第1図 年齢別補導経験の有無の分析結果



(2)教員の年齢別を分析すると、30歳までの教員は教員全体の28.1%であるが、補導経験のある教員は、そのうち63.0%で、年齢層の中では最も低く、経験のない教員が非常に多く32.8%である。無答は4.2%。

(3) 31～40歳の教員は全教員の57.3%を占める。経験のある教員90.1%、経験のない教員9.5%、無答は0.4%に減少している。

(4)41～50歳の教員は全教員の11.6%である。経験のある教員が前層よりも減少し89.8%、無答は2位で6.1%、経験のない教員は3位で4.1%である。

(5) 51歳以上は全教員の3.0% (13名) のため信頼値はやや稀薄であるが、経験のある教員が年齢層中では最も高く92.3%、無答は皆無になっている。

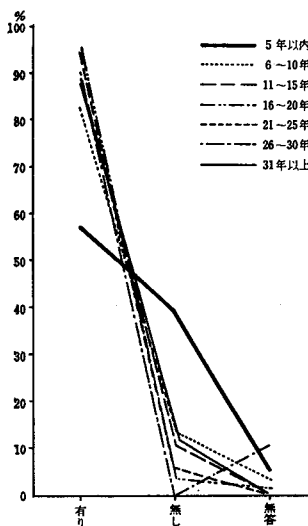
3. 教科別資料による分析 (第2表)

第2表 教科別経験の有無の分析

専門教科	順位	1	2	3	計
国語 14%		はい 83.6 (51)	いいえ 13.1 (8)	無答 3.3 (2)	100% (61)
数学 15%		はい 84.8 (56)	いいえ 13.6 (9)	無答 1.5 (1)	100% (66)
理科 13%		はい 84.9 (45)	いいえ 15.1 (8)	無答 0	100% (53)
社会 24%		はい 87.4 (90)	いいえ 9.7 (10)	無答 2.9 (3)	100% (103)
英語 15%		はい 80.0 (52)	いいえ 18.5 (12)	無答 1.5 (1)	100% (65)
家・職 9%		はい 67.6 (25)	いいえ 29.7 (11)	無答 2.7 (1)	100% (37)
保体 4%		はい 73.3 (11)	いいえ 26.7 (4)	無答 0	100% (15)
芸術 6%		はい 83.3 (20)	いいえ 12.5 (3)	無答 4.2 (1)	100% (24)
100%					(424)

注 カッコ内は実数  
はい……経験あり, いいえ……経験なし

第2図 教歴別補導経験の有無調べ



統計によれば、社会の教員に経験者が最も多く、未経験の教員が少ない。家・職、保体の教員に経験のある教員が比較的に少なく、未経験の教員が多い。これは研究(1)にも述べたが、教員の生徒との接触度、性別、担任制などの問題が補導経験に影響しているのではないだろうか。なお、西村淑子<sup>1</sup>氏は、学習落伍者の非行生になる率が非常に多いことを述べ、国、社、数、理、英の教科の落伍が多く、特に英、数などの理論学科では10~20%の落伍を出すので、非行対策はむしろ教科指導に問題があると指摘されている。この落伍者の多い教科と、補導率の高い教科とが、ほぼ合致していることを発見した。

#### 4. 教歴による分析 (第2図)

全体的には1位はすべて補導経験のある教員が占めている。教歴の浅い教員は補導経験も少ないが、年数とともに経験が増し16~20年では経験のある教員が95.3%で、

教歴層のうちでは最高となる。26年以降になると、経験のある教員が次第に減少し、無答あるいは未経験の教員が増加するが、これは年令別分析の結果と類似しているが、この意味をさらに研究しなければならない。31年以上では、教員数がわずか2.0%なので、信頼性が稀薄である。

#### 5. 勤務年数による分析

年数が高くなるに従い補導経験のある教員が増加しているが、そのほか特異な点は認められない。

#### 6. 回答と分類項目との関連は次のごとくであった。

(1)補導経験のある教員は、年令別では51歳以上、教歴16~20年、勤務年数16年以上の教員に最も多い。中年あるいは高年層として補導経験の豊かさを理解することができる。教科別では社会の教員に経験者が多い。

大都市中学校教員の指摘する非行に関する統計的研究(2)

(2)補導経験のない教員は前項に比し年層的に若さが目立つ。年令30歳まで、教歴5年以内、勤務年数5年以内の教員で、教科は家・職、保体である。

(3)無答の教員は年令別では41～50歳が殊に多く、経験のない教員を凌いでいる。教歴26～30年に最も多く10.0%で、経験のない教員よりも多いが、教員数が全体の2.0%のため信頼性が低い。勤務年数5年以内に2.6%の無答があり、これは低年令が原因となる場合を含んでいるが、6～10年にも1.4%みられる。国語、芸術の教員に多い。

問題Ⅱ

1. 調査結果を第3表によってみる。

第3表 補導に成功した時の原動力の序列(全体)

順位	1	2	3	4	5	6	7	計
原動力の内容	本人の自覚 30.2 (128)	指導者の愛情 25.2 (106)	家庭事情の解決 19.2 (81.5)	無答 11.1 (47)	友人関係の解決 7.2 (30.5)	将来に対する希望 5.1 (21.5)	その他 2.2 (9.5)	100% (424)

注 カッコ内は実数を示す。実数の0.5は1教員2回答の場合である。

(1)本人の自覚が30.2%で第1位である。本人の自覚によって補導を成功させた教員が全体の約3分の1を占める。自覚を得させるまでの指導者のなみなみならぬ努力や、生徒に対する愛情があってこそ成功したのであるが、非行から立ち直らせるには本人の自覚が何よりも重要であることを示している。分類項目別に本人の自覚を重視する教員を調べてみると、年令30歳まで、教歴26～30年、勤務年数6～10年、理科、英語の教員がこれを1位としている。問題Ⅲの無自覚、意志薄弱と併せ考える必要を痛感する。

(2)第2位は指導者の愛情である。研究(1)では非行原因について述べたが、第4表のごとく非行原因の63.8%は家庭環境であるが、そのうち48.0%は崩壊家庭に原因をおいている。心を憩うべき家庭がなく、殊に母の愛情が得られない青少年にとって、指導者は心の支柱であり、指導者の愛情、教員と生徒の心のふれ合いこそ非行を踏み止まらせる大きな力となる。重視する年層は、年令41～50歳、教歴16～20年、勤務年数11～15年の教員である。芸術、社会科の教員に多い。

(3)非行の原因が家庭にある場合が多く、前項にも述べたが、その約3分の1にあたる19.2%が家庭事

第4表 非行の原因(全体)

原因内容	教員数	%	
家庭環境	崩壊家庭	203.5	48.0
	母の愛情不足	37	8.7
	家庭の経済面	30	7.1
学校環境	師弟関係	2	0.5
	校内交友関係	25.5	6.0
地域環境	校外交友関係	40	9.4
	地域的環境	44	10.4
マスコミ環境	5.5	1.3	
その他	8.5	2.0	
無答	28	6.6	
計	424名	100%	

注 教員数の0.5は、1教員2回答の場合である。

大都市中学校教員の指摘する非行に関する統計的研究(2)

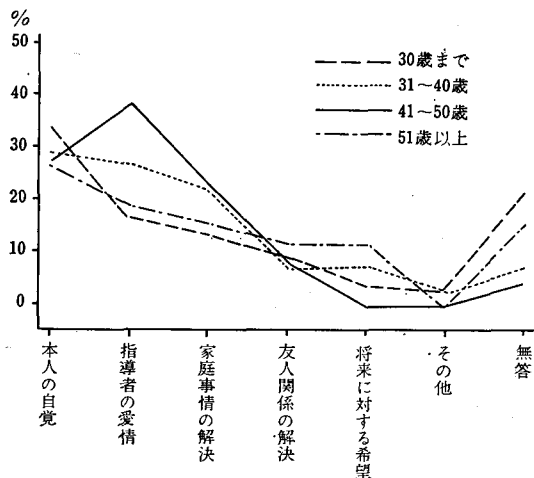
情を解決することによって成功をおさめている。補導に限界を感じつゝ、学校環境のみでなく家庭事情までも解決させて補導効果をあげられる教員の熱心さに心を打たれる。家庭事情を重要とする教員は、年齢別では41～50歳、教科では社会、理科、教歴は16～20年、勤務年数16年以上の教員である。

(4)非行原因が交友関係において発生する率は第4表のように校内、校外を含めて15.4%である。第3表の友人関係の解決は7.2%であるから、原因の約半数は解決とみられる。これは生徒に日々接触しているだけあって生徒補導が充分なわれ、成功をおさめていることが明らかである。

(5)将来に希望を与えて成功させた教員は5.1%である。家庭や学校の、殊に進学、就職などに希望を失った場合が考えられるが、比較的少ない。

(6)無答11.1%はやゝ多いが、次に掲げる問題Ⅲのように、効果があがらなかった場合、および問題Ⅰの補導経験のない者などを含んでいると考える。項目別は年齢、教歴、勤務年数とも段階の増すに従って減少し、そのうち年齢、教歴は最高年齢で再び増加する。

第3図 教員の年齢別序列比較



2. 教員の年齢別による分析(第3図)

(1)30歳までは無答が第2位、友人関係の解決で成功した場合がやゝ多く8.8%である。

(2)31～40歳の教員が全年令層中の57.3%を占める。指導者の愛情、家庭事情の解決がやゝ多い。

(3)41～50歳の第1位は指導者の愛情で38.8%は数字的にも多く、本人の自覚は27.6%で2位、家庭事情の解決も高率であるが、将来に対する希望は0である。

(4)51歳以上は第3表に近いが、上位がわずかに低く、本人の自覚と、その他を除いては大体同順位であるが、このことは全分野から補導し、成功をおさめているとみるべきであろう。本人の自覚は1位であるが、数字の上では前段階よりもむしろ少ない。無答が増加して15.4%である。

(5)四年令層を比較すると、30歳までは本人の自覚が圧倒的に多く、年齢が進むに従い下向する。指導者の愛情と家庭事情の解決は、年齢とともに多くなるが、最高年齢ではまた低くなる。無答はこれに反し次第に少なくなるが、51歳以上で急増が目立っている。

3. 教科別による分析

本人の自覚を1位とする教科は数学、理科、英語、指導者の愛情を1位とするのは国語、社

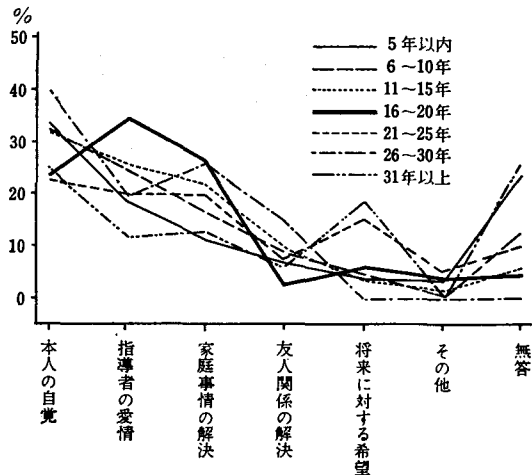
会、保体、芸術である。家・職では無答が1位を占め、また保体にも無答者が多く20.0%に達しているが、第1表にみるように両科とも補導経験者が少ない故と考えられる。芸術の1位は指導者の愛情であるが、2位家庭事情の解決、3位本人の自覚で、上位の順位が他科と著しく異なっている。社会の教員は全教科中の24.0%を占め信頼度はかなり高いが、平均と異なり1位は指導者の愛情、2位本人の自覚で、家庭事情の解決、将来に対する希望がこれに次ぐ。

#### 4. 教歴による分析 (第4図)

(1)全体的に中年層以後本人の自覚、無答が再び増加し、指導者の愛情、家庭事情の解決は減少する。これはさきに述べたが、年齢別分析の41歳以降の教員と類似する。

(2)年数が増すに従い無答の位置が下がっているが、最高教歴では再び2位に上っている。

第4図 教歴年数別の序列比較

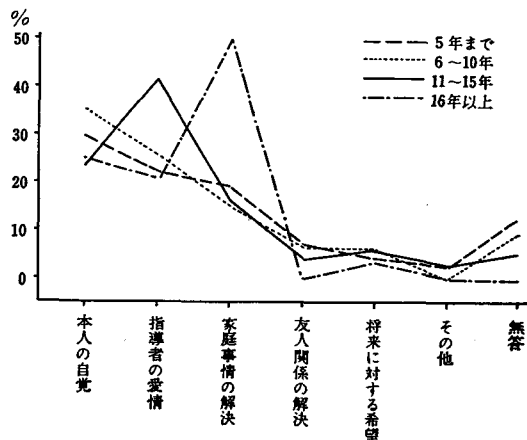


#### 5. 勤務年数の分析 (第5図)

(1)年数が増すことに無答が下位に移動する。

(2)11～15年では指導者の愛情が41.7%、また16年以上では家庭事情の解決が50.0%でそれぞれ1位を占める。家庭事情の解決は至難であるが、同一校に16年以上も勤務すれば、さすがに地域の特殊性や生徒をめぐる家庭内外の事情にも精通し、理解をもって困難な事情をも解決し得るのではないかと考える。家庭事情の解決が第1位という他の年層と全く異なる結果が出されたが、最高年層である点で、年齢別と教歴別とが関連があったように、勤務年数もこれらと併せ考える必要がある。

第5図 勤務年数別序列比較



#### 問題Ⅲ

1. 第5表によって全体的にみると、個人にその理由ありとみられるもの即ち、意志薄弱、無自覚、身体虚弱の合計は48.2%、家族の非協力、難問題の未解決、マスコミ関係など環境によるもの合計36.7%、その他2.2%、無答13.0%となっている。

第5表 効果があがらなかった理由の序列(全体)

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	計
効果があがらない理由の内容	意志 30.3 (128.5)	家族 28.9 (122.5)	無自覚 17.7 (75)	無答 13.0 (55)	難問 7.7 (32.5)	その他 2.2 (9)	身体 0.2 (1)	マスコミ 0.1 (0.5)	100% (424)

注 1. 上の表は略称で示す。意志(意志薄弱) 家族(家族の非協力) 難問(難問題の未解決)  
身体(身体虚弱) マスコミ(マスコミ関係)  
2. カッコ内は実数を示す。

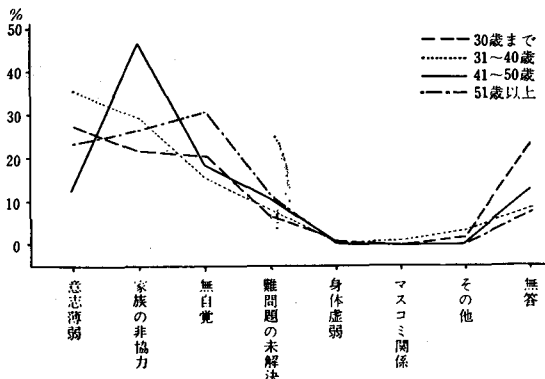
(1)意志薄弱は30.3%であった。身体的理由0.2%に対して精神面の意志薄弱、無自覚を合計すると全体の約半数であるから、補導を妨げた理由としては非常に大きいものとなる。これは精神面の不在を意味している。精神面の鍛錬によって強い意志を培うことは単に補導効果をあげるのみならず、自己の意志により非行への脱落を止めさせるという非行防止の一大対策になると考える。問題Ⅱの本人の自覚と関連をもつ。意志薄弱は、年令、教歴、勤務年数とも中年層に一時的減少傾向がみられる。

(2)教員の指摘する非行原因の63.8%が家庭環境にあることは第4表の通りで、研究(1)において既に述べたが、その約半数28.9%が家族の非協力のために効果があがらないと解される。教員がいかに努力しても、家庭の協力なくしては補導を成功させることは困難である。非行原因が家庭にあるとの結論が出されても、これでは、その原因を取り除き青少年を非行から立ち直らせることは難しい。なぜ非協力的なのかについては第4表家庭環境のうちの崩壊家庭48%が示唆的である。家族の非協力は年令、教歴、勤務年数ともに中年層で一時急増している。

(3)無自覚は、1位の意志薄弱とともに個人的理由であって、精神面の鍛錬不足が目立つ。問題Ⅰの本人の自覚と関連があるほかは、分類項目間では概して稀薄である。

(4)難問題の未解決、教員のいかなる努力をもってしても解決し得ぬ問題である。年令の増すごとに高くなる。

第6図 年令別序列比較



(5)その他2.2%

(6)身体虚弱はわずか0.2%、精神面の重視に比し、殆んど理由にならない。

(7)マスコミ関係は最下位0.1%であるが、研究(1)においても殆んど非行原因とみられず、わずか1.3%にすぎなかった。

## 2. 年令別による分析(第6図)

(1)全体を通じ意志薄弱が1位であるが、年令層ごとに著しい増減のあるこ



大都市中学校教員の指摘する非行に関する統計的研究(2)

とを折線グラフで見ることが出来る。無答は年層が進むとともに下位に、無自覚は上位に移動する。家族の非協力も次第に上位になるが、最高年令で2位に下る。マスコミ関係0.2%をあげるのは31~40歳の一年令層のみである。

(2)30歳までは無答は2位で22.7%は多い感があるが、最低年令のための未経験と解される。

(3)41~50歳では家族の非協力が46.9%で第1位を占めるが、実に驚くべき高率である。それに比し、意志薄弱は非常に少なく、12.2%で3位に落ちている。

(4)51歳以上の第1位無自覚は30.8%で高い。家族の非協力は2位、意志薄弱は再増加し23.1%、マスコミ関係は前年に引続き0である。

3. 教科による分析

第6表 教科別の序列分析

順位 専門教科	1	2	3	4	5	6	7	8	計
国語 14%	家族 29.5 (18)	意志 27.9 (17)	無自覚 16.4 (10)	難問 13.1 (8)	無答 13.1 (8)	身体 0	マスコミ 0	その他 0	100% (61)
数学 15%	家族 37.1 (24.5)	意志 25.8 (17)	無自覚 18.2 (12)	無答 13.6 (9)	難問 5.3 (3.5)	身体 0	マスコミ 0	その他 0	100% (66)
理科 13%	意志 36.8 (19.5)	家族 27.4 (14.5)	無自覚 16.0 (8.5)	無答 9.4 (5)	難問 7.5 (4)	その他 1.8 (1)	身体 0.9 (0.5)	マスコミ 0	100% (53)
社会 24%	家族 33.0 (34)	意志 28.2 (29)	無自覚 17.5 (18)	無答 11.7 (12)	難問 5.8 (6)	その他 3.9 (4)	身体 0	マスコミ 0	100% (103)
英語 15%	意志 40.8 (26.5)	無自覚 19.2 (12.5)	家族 17.7 (11.5)	難問 10.8 (7)	無答 9.2 (6)	その他 1.5 (1)	マスコミ 0.8 (0.5)	身体 0	100% (65)
家・職 9%	家族 28.4 (10.5)	無答 27.0 (10)	意志 21.6 (8)	無自覚 12.2 (4.5)	難問 5.4 (2)	その他 5.4 (2)	身体 0	マスコミ 0	100% (37)
保体 4%	家族 33.3 (5)	意志 30.0 (4.5)	無自覚 16.7 (2.5)	無答 13.3 (2)	難問 6.7 (1)	身体 0	マスコミ 0	その他 0	100% (15)
芸術 6%	無自覚 29.2 (7)	意志 29.2 (7)	家族 18.8 (4.5)	無答 12.5 (3)	難問 4.2 (1)	その他 4.2 (1)	身体 2.1 (0.5)	マスコミ 0	100% (24)
100%								計	(424)

注1. カッコ内は実数を示す。

2. 同率の場合も便宜上順位を付した。

第6表にみるように、意志薄弱を1位とする教員は理科、英語のみで、他の教科は家族の非協力をあげている。芸術のみ1位が無自覚で、家・職とともに他科と相違しているが、問題Ⅱの教科別分析における芸術でも、やはり他の教科と異なる点が見出されている。

#### 4. 教歴による分析

(1) 5年以内では、無答が非常に多く23.1%で2位を占める。無自覚、家族の非協力はともに3位であるが、無自覚が全体の統計よりもやゝ多くなっている。

(2) 6～10年では無答が3位に落ち、無自覚は11.6%で前段階に比して約3分の1に減じている。マスコミ関係は前年層と同じく皆無。

(3) 11～15年は無自覚が再び増加し、無答は4位に下がっている。

(4) 16～20年では家族の非協力が41.9%で1位になり、これまでの年層で1位にあった意志薄弱が下位へ、無答は前年層よりさらに落ちて3.5%で5位である。

(5) 21～25年でも家族の非協力が第1位、無自覚は2位に上り、無答は増加して15.0%になっている。

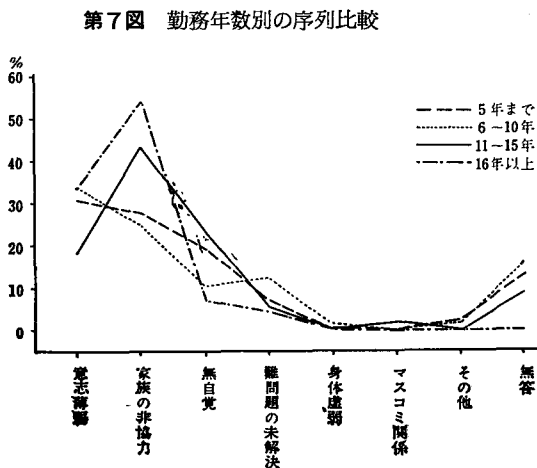
(6) 26～30年では意志薄弱が著しく増加し、再び1位で45.0%、身体虚弱は5.0%で多く、難問題の未解決、マスコミ関係、無答は皆無である。

(7) 31年以上も1位は意志薄弱であるが、2位は家族の非協力、難問題の未解決ともに18.8%、前者は非常に少なく、後者は大変な増加である。無答は再び上昇し12.5%になっている。

(8) 全体的に1位は意志薄弱と家族の非協力とであるが、意志薄弱は21～25年のみ一時的に急減する。家族の非協力は5年以内では21.4%で4位、その後次第に増加し、16～20年で1位になるが、31年以上では再び減じて18.8%である。無自覚は増減を繰り返して21～25年が最も多く、それ以後は少なくなっている。無答は21～25年以降増減が甚だしいが、教員数が少ないので実数としてはわずかである。難問題の未解決は4～5位を占めるが31年以上では18.8%に急増する。

#### 5. 勤務年数による分析 (第7図)

(1) 5年以内が教員全体の71.0%であるために信頼性が高く、第5表の全体の平均と同順位で数字の上でも大差がない。



数字の上でも大差がない。

(2) 6～10年は無答が3位、4位の難問題の未解決は12.2%で少しばかり多いが、無自覚10.8%は平均よりも低く5位である。身体虚弱が増して0.7%であるが、マスコミ関係は前年層と同じく0である。

(3) 11～15年は前年までの1位の意志薄弱に代って、家族の非協力重視が目をはひく。無自覚が2位、意志薄弱は少なく18.1%第3位、また無答8.3%は前年の約半数であるが、マスコミ関係

は多くなり、1.4%を占める。

(4)16年以上も前年層と同じく、家族の非協力が第1位、54.2%は非常に高率で、回答全体の約半数以上にあっている。5年以内の27.2%に比し大変な増加である。無自覚8.3%は非常に少ないが、身体虚弱、マスコミ関係、無答とも0で回答が4位までに集中している。

問題Ⅳ

1. 〓他校の生徒が喫煙などの不良行為をしている場合にあなたは積極的に補導しますか、の設問に対し第7表のような回答を、また 〓その生徒の在籍校に連絡するだけですか、に対しては第8表の通りの回答を得た。この二問を組み合わせて1つの問題として集計したのが第9表である。なお、集計方法については資料の整理(4)に既述した。

(1)補導する教員は77.5%であるが、その内訳は積極的補導47.7%、在籍校に連絡するだけ29.8%になっている。補導する教員の高率の年層は、年令、教歴、勤務年数とも中年層にみられ、問題Ⅰの補導経験のある教員と大体よく似た傾向である。

これに反し、補導する教員が少ないのは概して最低年層で、高年層がこれに次ぐ。そのうち積極的に補導する教員も、やはり中年層であるが、前記より一段階高く、また社会科の教員に多くなる。在籍校に連絡だけする教員については各分類項目間の関連性がみられない。

(2)補導しない教員は、全般的に低年層に多いが、年数段階とともに増加し、中年層で一時的急減、最高年層で再増加する。教科は英語、芸術に圧倒的に多い。

(3)無答は年令、教歴、勤務年数を通じ、最低年層と高年層に比較的多く、中年層では減少している。最低年層の無答は、問題Ⅰの補導経験のない教員層と類似した傾向を示している。以下は、第9表を全体平均として、さらに項目分類別に分析したものである。

2. 年令別の分析 (第10表)

(1)30歳までが全年令の28.1%を占める。補導する教員が少ないが、そのうちでは積極的補導

第7表 問題Ⅳの1と回答結果

他校の生徒が喫煙などの不良行為をしている場合に、あなたは積極的に補導しますか	はい	いいえ	無答	計
	47.6 (202)	42.9 (182)	9.4 (40)	100% (424名)

注 カッコ内は実数

第8表 問題Ⅳの2と回答結果

その生徒の在籍校に連絡するだけですか	はい	いいえ	無答	計
	44.6 (189)	28.3 (120)	27.1 (115)	100% (424名)

注 カッコ内は実数

第9表 不良行為に対する補導の有無 (全体)

問題Ⅳ (全体)	補導する		補導しない	無答	計	
	積極的に補導する	在籍校に連絡するだけ				小計
	47.7 (202)	29.8 (126)	77.5 (328)	15.8 (68)	6.7 (28)	100% (424)

注 カッコ内は実数

第10表 年令別の分析結果

年令別	補 導 す る			補 導 しない	無 答	計
	積極的に 補導する	在籍校に 連絡する だけ	小 計			
30歳まで 28.1%	36.1 (43)	37.0 (44)	73.1 (87)	13.4 (16)	13.5 (16)	100% (119)
31～40歳 57.3%	53.2 (129)	24.2 (59)	77.4 (188)	17.6 (43)	5.0 (12)	100% (243)
41～50歳 11.6%	49.0 (24)	38.8 (19)	87.8 (43)	12.2 (6)	0	100% (49)
51歳以上 3.0%	46.3 (6)	30.7 (4)	77.0 (10)	23.0 (3)	0	100% (13)
100%					計	(424)

注 カッコ内は実数

をする教員よりも連絡だけする教員の方が多いが、年令的に浅く、補導経験もまた少ないからではないだろうか。無答も甚だ多い。

(2)31～40歳は全年令の57.3%であるので内容においても確実性があるが、補導する教員が多く前年令層よりも著しい増加を示す。補導しない教員は17.6%である。

(3)51歳以上では補導年令層

のわずか3.0%で信頼度はきわめて稀薄であるが、補導しない教員が23.0%もあって、消極的乃至傍観的態度が目立つ。

(4)全体的に31～40歳に積極的補導が多く、連絡だけする教員は全年令層中でも最低である。補導しない教員は51歳以上が最高である。

### 3. 教科別の分析

(1)国語では補導する教員のうち積極的補導はやゝ低く37.7%、連絡だけする教員が多く36.1%、補導しない教員、および無答は13.1%の同数である。英語もこれと類似した傾向であるが、補導しない教員24.6%で多く、補導に対する積極性がみられないが、無答は少なく4.6%であった。

(2)数学の連絡する教員は全教科中最も多く40.9%を占め、無答も3.0%で最低、補導に関する積極性が見うけられる。

(3)社会は全教科のうちの24.0%であるため、信頼し得る結果が得られた。補導する教員は59.2%で全教科中の最高であり、そのうち連絡だけする教員は20.4%、補導しない教員16.5%で理科、家・職の教員もこれと大体よく似た傾向を示す。

(4)保体、芸術とも教科中で教員の占める割合が少なく、確実性に乏しい。芸術は補導しない教員が実に25.0%に達している。

### 4. 教歴による分析 (第11表)

(1)低年層の5年以内では積極的補導39.5%、連絡だけする教員34.1%、補導しない教員15.4%、無答11.0%で年層中で一番低い。6～10年もこれとほぼ同様である。

(2)11～15年が全教歴中の29.0%を占めるが、前段階に比し積極性が著しくあらわれている。補導する教員の中で積極的補導54.4%、連絡のみは25.2%であり、補導しない教員16.3%、無答4.1%であって16～20年もこれと大体同じ傾向を示している。

大都市中学校教員の指摘する非行に関する統計的研究(2)

(3)21～25年を頂点に積極的補導が再び減少し、31年以上では最低年層よりもさらに下がっている。無答が再増加するのがみられる。

5. 勤務年数による分析 (第12表)

(1)1～15年までは年数の増加に従い積極的補導もまた増し、連絡だけする教員および補導しない教員が減じているが、11～15年のみ補導しない教員22.2%の急増が目立つ。無答は皆無である。

喫煙は非行化の第一歩である。しかし、中学生が煙草を喫うに至る過程には、まだまだ教師や両親を含めた大人達の配慮が欠けている。布袋茂子氏は、大阪府下の公立中学校の男子三年生を対象に、喫煙に関する調査をなし、喫煙して注意されるのは親に次いで先生、注意されてもなお喫い続けているのを知っているのは同級生に次いで先生、まわりで喫うのは父に次いで先生であると述べておられる。

なぜ中学生が喫ったりする

のか。に対する回答からは意志薄弱や無自覚さが指摘され、問題Ⅱにあげられた本人の自覚の必要性を今更ながら痛感すると同時に、戦後特に、知に偏するのあまりに情意を欠き、精神不在をもたらした、青少年をめぐる家庭をも含めた教育全般について再検討し、非行の発生を食い止めなければならないと考える。さらに布袋氏は、喫煙経験のある者の方が、学校に対する興味が薄く、学校生活を楽しまず、問題中学生の半数は喫煙経験をもち、経験者ほど補導率が

第11表 教歴別の分析

教歴別	補導する			補導しない	無答	計
	積極的に補導する	在籍校に連絡するだけ	小計			
5年以内 21%	39.5 (36)	34.1 (31)	73.6 (67)	15.4 (14)	11.0 (10)	100% (91)
6～10年 20%	39.5 (34)	34.9 (30)	74.4 (64)	15.1 (13)	10.5 (9)	100% (86)
11～15年 29%	54.4 (67)	25.2 (31)	79.6 (98)	16.3 (20)	4.1 (5)	100% (123)
16～20年 20%	54.6 (47)	24.4 (21)	79.0 (68)	18.6 (16)	2.3 (2)	100% (86)
21～25年 5%	55.0 (11)	25.0 (5)	80.0 (16)	20.0 (4)	0	100% (20)
26～30年 2%	40.0 (4)	50.0 (5)	90.0 (9)	0	10.0 (1)	100% (10)
31年以上 2%	37.5 (3)	37.5 (3)	75.0 (6)	12.5 (1)	12.5 (1)	100% (8)
					計	(424)

注 カッコ内は実数

第12表 勤務年数別の分析結果

勤務年数別	補導する			補導しない	無答	計
	積極的に補導する	在籍校に連絡するだけ	小計			
5年まで 71%	46.0 (139)	30.8 (93)	76.8 (232)	16.6 (50)	6.6 (20)	100% (302)
6～10年 17%	50.1 (37)	29.7 (22)	79.8 (59)	10.8 (8)	9.4 (7)	100% (74)
11～15年 9%	55.5 (20)	22.3 (8)	77.8 (28)	22.2 (8)	0	100% (36)
16年以上 3%	50.0 (6)	25.0 (3)	75.0 (9)	16.7 (2)	8.3 (1)	100% (12)
100%					計	(424)

注 カッコ内は実数

## 大都市中学校教官の指摘する非行に関する統計的研究(2)

高いことも調査の結果明らかにされている。この種の資料はまことに得難く、補導者たる教官、その対象者たる中学生自身、この両面から非行の問題点を究明するにあたり貴重な資料であった。

### V 要 約

1. 大都市中学校教官の指摘により、次のような序列および差異を発見した。

#### 問題 I

##### (1)序列

第1位 補導経験のある教官 82.5%

第2位 補導経験のない教官 15.3%

第3位 無答 2.1%

##### (2)教官による差異

###### (イ)年令別

補導経験のある教官は、概して年令段階の高さに応じて高く、経験のない教官と無答は低く、教官としての経験の豊富さを物語っている。30歳までは、経験のある教官が四段階中最低63.0%で、他の年令層とは著しく異なる点であるが、低年令によるものと解される。31~40歳は、年層中57.3%を占めるので、信頼し得る結果となっている。41~50歳だけは、経験のある教官が前層よりも減じ、また、無答がこの層のみ第2位にあがっている。

###### (ロ)教科別

教科中、社会の教官が24.0%で信頼度は高く、英語、数学、国語、理科がこれに次いでいるが、家・職、芸術、保体は教官数が少なく確実性が稀薄である。補導経験のある教官は社会に多く、経験のない教官は家・職、保体に特に多い。無答は芸術、国語に比較的多い。

###### (ハ)教歴別

年令別とは最も関連が深く、低年層には補導経験のある教官が少ないが、まだ教官としての経験が浅く止むを得ない。経験のある教官は最低年層に目立って低く、16~20年が最高、以後は減少傾向を示す。経験のない教官はこれとは逆である。11~15年が教官の29.0%を占め、内容的にも確実性が高い。

###### (ニ)勤務年数別

補導経験は年数とともに高くなるほかは、特異性がみられない。

#### 問題 II

##### (1)序列

第1位 本人の自覚 30.2%

第2位 指導者の愛情 25.2%

第3位 家庭事情の解決 19.2%

第4位 無答 11.1%

第5位 友人関係の解決 7.2%

## 大都市中学校教官の指摘する非行に関する統計的研究(2)

第6位 将来に対する希望 5.1%

第7位 その他 2.2%

### (2)教官による差異

#### (イ)年令別

第1位は本人の自覚であるが、41～50歳のみ指導者の愛情をあげている。なお、中年二層は、指導者の愛情と家庭事情の解決を他層よりも重視し、無答は低年層に次いで高年層に多い。

#### (ロ)教科別

家・職の第1位は無答であるが、そのほかの教科では本人の自覚、あるいは指導者の愛情が第1位である。無答は全教科に亘り多くなっているが、殊に保体が目立っている。

#### (ハ)教歴別

全体的に本人の自覚を重視しているが、16～20年のみ指導者の愛情が第1位で、5年以内と31年以上には無答が多い。年令別と関連性が濃い。

#### (ニ)勤務年数別

第1位は本人の自覚であるが、11～15年は指導者の愛情を16年以上では家庭環境を重視して家庭事情の解決を第1位とする。年令別、教歴別と関係が深い。

## 問題Ⅲ

### (1)序列

第1位 意志薄弱 30.3%

第2位 家族の非協力 28.9%

第3位 無自覚 17.7%

第4位 無答 13.0%

第5位 難問題の未解決 7.7%

第6位 その他 2.2%

第7位 身体虚弱 0.2%

第8位 マスコミ関係 0.1%

### (2)教官による差異

#### (イ)年令別

41～50歳では46.9%が家族の非協力、51歳以上は無自覚、そのほかの層は意志薄弱を第1位とする。41～50歳の意志薄弱は目立って低く、最低年令層には無答が多い。

#### (ロ)教科別

家族の非協力を第1位にあげるのは国語、数学、社会、家・職、保体、そのほかの教科は第1位を意志薄弱とするが、芸術だけは意志薄弱と無自覚とが同数である。無答は全体的に多く、特に家・職は27.0%にも達している。社会の教官数は教科中の24.0%であるため確実性も

高い。

(イ)教歴別

第1位を家族の非協力とする年層は16～20年、および21～25年で、それ以外の層はすべて意志薄弱である。無自覚、難問題の未解決は、年数段階ごとにかかりの開きがみられる。5年以内に無答が多く23.1%であり、家族の非協力は年数とともに増加し、16～20年を頂点として減少する。

(ロ)勤務年数別

精神的理由の意志薄弱を第1位とするのは5年まで、および6～10年であって、11～15年以降の年層は、家庭環境として家族の非協力を重要とする。年令別、教歴別と深い関連性をもつ。無答は低年層よりも6～10年の方が多くなっている。

問題Ⅳ

(1)序列

第1位	補導する教官	77.5%
	内訳	積極的補導 47.7%
		在籍校に連絡するだけ 29.8%
第2位	補導しない教官	15.8%
第3位	無答	6.7%

(2)教官による差異

(イ)年令別

補導する教官が多いのは中年層である。補導しない教官は最高年令層に多くみられ23.0%であり、無答は低年層に多い。

(ロ)教科別

補導する教官は数学が最高率を占め、家・職は最低である。そのうち、積極的補導は社会、芸術に、連絡だけする教官は数学に、また補導しない教官は芸術、英語、無答は家・職、国語にそれぞれ多くなっている。保体は全教科のわずか4.0%で信頼性が低い。

(イ)教歴別

補導する教官は年数とともに増加するが、最高年層では急減する。補導しない教官も年数が高くなるに従い増加し、21～25年では20.0%で最高、次の年層では皆無、そして最高年層で再び12.5%に増加する。無答は年数が増すごとに減じ、21～25年では0、以後は、また増加している。

(ロ)勤務年数別

補導する教官は6～10年が最高、以後は減少する。補導しない教官は11～15年に多く、この年層の無答は0である。

2. 問題Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳを比較考察することにより、次のような結果を得ることができた。



## 大都市中学校教員の指摘する非行に関する統計的研究(2)

これは本研究の最も特異とするところであり、非常に大きな収獲であった。

### (1)非行原因との関連性

研究(1)非行原因と今回の問題Ⅱ、Ⅲを比較検討して次の結果を得た。

(イ)中学校教員は非行原因の63.8%が家庭環境において発生すると考えるが、そのうち崩壊家庭が48.0%を占めている。家庭事情の解決をはかり、補導を成功させた場合は19.2%、原因が家庭にあると知りながら、家族の非協力で効果があがらなかった場合が28.9%である。

(ロ)非行原因を交友関係に求める教員は15.4%で、友人関係を解決させることにより補導を成功させた教員がその約半数7.2%である。

(ハ)マスコミ環境から非行が発生するとみる教員は、わずか1.3%であったが、補導効果があがらぬ理由にマスコミをあげる教員も僅少で0.1%にすぎない。しかし、この0.1%は補導した結果を示すもので確実性が高い。マスコミは広範囲に及び、また近年急速に発展してきた環境であるが、欲求不満をもち、家庭や学校で疎外された青少年にとっては有害環境となる。早急に研究がなされて、非行防止に役立てられねばならない。

### (2)教員年層の特異性

(イ)補導経験の有無の年令別調査によって、最も年令の低い30歳までの年令層のみが、他層と全く異なる結果を示すことを発見した。(第1図)また、教歴別調べ(第2図)においても、最低年層に、これとほぼ同様の特殊な結果を得た。両者は年層的に未経験が多い点で一致し、関連性をもつものと考えられる。

(ロ)年令41～50歳、教歴16～20年、勤務年数11～15年の年層に、共通の関連性を見出すことができた。即ち補導が成功した時の原動力は本人の自覚を第1位とするのがおおかたの意見であった。しかるに、この年層のみは一致して指導者の愛情を第1位としている。また、効果があがらなかった理由も、この年層のみは揃って第1位に家族の非協力をあげている。これは、この層だけがもつ特異性である。年層上からも既に指導的立場にある教員層であるから、信頼すべき結果とみなければならぬ。次に、第3～7図にみるように、前層まではなだらかな曲線であるのに対し、この層以後は起伏が激しくなる。これもこの層がもつ特徴である。また、この年層以降高年になるに従って総体的に積極性がみられず、無答が多く下降現象がみえるのは、年層的に多少マンネリズムの傾向を示しているのではあるまいか。

(ハ)教員別年層の高低間に差異のあることを発見した。成功した原動力において、低年層では本人の自覚を第1位として起伏が少ない。これに比し、中年層は指導者の愛情を、高年層は家庭事情の解決を重視し、起伏がかなり激しくなっている。(第5図)

(ニ)高年層では家庭環境重視の傾向がみられた。16年以上勤務の教員は家庭環境を重視し、家庭事情の解決によって補導を成功させた場合が50.0%、家族の非協力のために効果があがらなかった場合が54.2%である。研究(1)では、最高年層では非行原因の大半が家庭環境にあった。即ち、非行原因と、成功した原動力、および、効果があがらなかった理由、この三者とも

家庭環境重視において一致する。本人の精神的理由を重要とする他層とは著しい相違である。

(4)不良行為を補導する教官は、年令層の中で最低年令のみ特に少なくなっている。年層の進むに従って積極的補導が増加するが、最高年層では急減する。補導する教官が多い層は年令41～50歳、教歴26～30年、勤務年数6～10年で、(2)項とやゝ異なるが、やはり中年層である。補導しない教官の多くは中年以降者で、年令51歳以上、教歴21～25年、勤務年数11～15年の教官である。

(3)専門教科においては家・職の教官に無答者が圧倒的に多い。補導に成功した時の原動力では29.7%、効果があがらなかったと考えられる理由では27.0%、不良行為に対する補導の有無でも無答が19.0%もあって、いずれも全教科中の最高である。なお、補導経験の有無については、無答よりも未経験者の方が多く29.7%で、やはり教科中、最高率である。

(4)中学校教官は青少年の精神面を重視する。補導を成功させた原動力の統計によれば、本人の自覚30.2%が第1位であり、効果があがらなかった理由でも全体の平均の第1位は意志薄弱30.3%、第3位無自覚17.7%、これを精神面の理由として合計48.0%で、全体の約半数となる。

非行青少年に対しては、教官の指導はあくまでもアドバイスであって、彼等自身が更生しようとするのが何よりも重要である。彼等青少年の無自覚を意識させ、自主性をもち、善悪の判断が自分自身にできるように鍛えられなければならない。家庭および学校、その他あらゆる環境から発生する非行問題も、本人の自覚において防止できるという考えに立つとき、精神面の錬磨が、現代の青少年にとって、いかに重要であるかを理解することができる。

## 文 献

- (1) 西村 淑子 学習落伍者と非行傾向 関西教育学会第19回大会(41.11.13)発表要旨による
- (2) 布袋 茂子 煙草を喫う中学生が増えてきた 少年補導 大阪少年補導協会発行  
11の5 昭41. 86～96頁  
(本学教授—教育学)  
(本学助手—教育学)